JICA シニアボランティア 千葉
SV ニュース
第3号

平成十七年度 通常総会開催

平成十七年度通常総会は、五月二十八日（土）十三時からぱるるプラザ千葉で開催されました。出席は会員三十五名、会員家族一名、来賓九名計四十五名でした。品川洋之助会長の挨拶のの、来賓を代表してＪＩＣＡ青年海外協力隊事務局 事務局長 大塚正明氏および千葉県総合企画部企画調整課国際政策室 室長 佐々木克郎氏よりご挨拶を頂きました。その内容はこの会報の二頁に掲載してあります。

品川会長が総会議長に選出され平成十六年度活動・会計報告、会計監査報告、平成十七年度活動計画・予算案の審議が行われ活発な質疑の後、原案どおり決定されました。書記に井川雅子会員と山本茂穂会員が指名され、総合司会は梅谷陽子副会長があたりました。

講演者以外の来賓は次ぎの方々でした。

本田 勝 氏（ＪＩＣＡ東京センター・連携促進グループ）
渡邉和佐氏（千葉県総合企画部企画調整課国際政策室）
藤谷芳孝氏・鈴木庄一氏（ＳＶ経験を活かす会副会長）
大山美砂子氏（ＪＩＣＡ国際協力推進員）

品川会長挨拶

「会長挨拶要旨」

年ごとに会員数が増加すると共に活動の巾が広がってきました。平成十七年度の重点活動としてＪＩＣＡのＳＶボランティア制度改革への対応・ＪＯＣＶ ＯＢ会・ＳＶ経験を活かす会との連携・海外研修員受入制度への支援・質の向上、広報活動の強化などを計画しています。「創立時の初心を忘れず、有意義に、穏やかに、楽しく行こう。」をモットーとしたいと思います。

「新たに決定された事項」

○家族会員の新設

ＪＩＣＡの随伴家族制度を考慮して、会員の配偶者で入会を希望する方を家族会員として登録するという規約改正が行なわれました。

○平成十七年度役員

平成十七年度役員として次ぎの諸氏が選出されました。

会長　品川洋之助
副会長　梅谷陽子（総務）
副会長　黒田昭太郎（広報）
幹事　山本修身（事務局長）
幹事　上田義晴（渉外）
幹事　山本茂穂（広報）
幹事　後藤 優（会計）
会計監査　泉岡輝元
括弧内は総会後決まった主な担当業務です。

質疑風景

なお及川淳一氏、楠木孝雄氏、岡本栄一郎氏が退任され、品川会長より謝辞が述べられました。

引き続き新入会員が紹介され、十五時の総会終了後、派遣国グループに分かれて懇親会が行われ、さらに話がはずみました。

第三回定例会のお知らせ

日時　平成一七年十二月十日（土曜日）十時より
会場　ぱるるプラザ千葉

(特別寄稿)

ＯＢ会の維持と更なる発展

山口公章
ＪＩＣＡ東京国際センター所長

会員の皆様、日頃より私どもの活動をご支援いただき、心より感謝いたします。私事ではありますが、四月にＪＩＣＡ東京に異動になり、早くも五ヶ月が過ぎようとしています。品川会長はじめ役員の皆様と何度かお会いし、皆様方のご活動をお聞きするにつけ、皆様方のご支援により私どもの市民参加促進、国際理解教育支援が成り立っているなと実感しているところです。

貴ＯＢ会のような組織、活力のある組織はどのように維持されているのか、またそうした組織の活動なり運営のポイントは何か、について考えてみました。

例としてあまり適当ではないと思いつつ書いているのですが、私は今まで多くの南米日系社会を見て来ました。日本人会、農業協同組合、青年会、婦人会、などなど・・。

いずれの団体もその維持と更なる発展という点では苦労されています。上手く運営されている団体についてその要因を考えました。二点あります。あたり前の事ですが、その実践となると難しいものです。

①会員にとって無理のない活動内容であり、その活動により、何らかの充実感が得られる。

②会をまとめる役員とそれを支える会員の関係が良好である。

貴会の場合、この二点について無理のない関係が構築されていると思います。品川会長とはパラグアイ時代よりいろいろと意見交換をさせて頂いておりますが「ＪＩＣＡ事業の支援だけでない、ＯＢ会としてできる活動も視野に入れている」とおっしゃっています。極めて重要なポイントだと思います。

七年ほど前になりますが、北海道十勝の青年海外協力隊ＯＢ会の皆様とその活動・組織の維持について議論をした事があります。ＯＢ会自身の活動として地元の教育委員会や学校めぐりをＯＢ会がされていました。ＯＢ会への参加も全くの自由でした。最近の同会は、役員の世代交代も順調に行われ、更なる活動をしているとお聞きし、嬉しく思っています。

協力隊隊員として、シニアボランティアとして活動したのでその還元を、とＪＩＣＡの活動の中でだけ考えていたくとどうしても行き詰まりがでてきます。

貴会の更なるご発展を願い、今後の私どもへのご協力をお願いしてご挨拶とさせていただきます。

平成十七年度総会来賓挨拶内容

ＪＩＣＡボランティア事業の現状と展望

独立行政法人 国際協力機構
青年海外協力隊事務局長
大塚正明 氏

ＪＩＣＡは二〇〇三年十月の独立行政法人化以降、「現場主義」「人間の安全保障」「効果・効率性と迅速性」を三つの改革の柱として、様々な改革に取り組んできております。また、開発課題の面では、膨大な開発ニーズのあるアフリカへの支援を強化し、近年その必要性が強調されております平和構築・復興支援などの取り組みも強化しております。さらに、国民参加の促進等を通じて、より多くの国民のＯＤＡに対する理解と支持を得ることも重要な課題と考えております。

ボランティア事業におきましても、ＪＩＣＡ全体の改革の方向性に沿った事業実施が求められております。具体的には、先ず、国民参加の促進の観点から二〇〇四年度から二〇〇六年度までの三年間で青年海外協力隊とシニア海外ボランティアのＪＩＣＡボランティアへの年間の参加者数を十パーセント増加し、千八百七十名を達成することを目標としております。また、派遣に際しては当該国の開発ニーズに合致した分野への派遣のため、個々の要請に対応してボランティアを派遣するという考え方から転じて、より戦略的に国別派遣計画を策定した上での派遣とするための取り組みを行っております。

ＪＩＣＡボランティア事業が草の根レベルでの活動を通じ、開発途上国の経済や社会の発展に寄与する事業として大きな期待を寄せられており、以上のような改革を通じてより期待に応えられる事業にしていきたいと考えております。

ボランティア精神に裏付けられたＪＩＣＡボランティアの方々の活動に対する姿勢や活躍は、相手国と日本との友好親善、相互理解にも大きな貢献をしていると申上げることができます。現地の人々と生活を共にし、その機微に触れて活動する。地域の人々と向き合い、直に何を求められているかを感じ取りながら活動する。このような活動であるからこそ、日本国内外からの大きな共感とご支援をいただけるものと考えています。

また、ボランティア事業への参加を通じて得られた貴重な経験が活用、還元されるということも本事業の大きな特徴となっています。帰国後に日本国内や国際社会での仕事を通じて、あるいは、様々な機会に発言し、行動していくことを通じて、ボランティアの貴重な経験が社会に還元され、本事業への理解が一層深まっていくものと信じております。

千葉県の国際政策 - 技術協力の促進 -

千葉県総合企画部
国際政策室 室長
佐々木克郎 氏

本日は千葉県ＪＩＣＡシニアボランティアの会、平成十七年度通常総会にお招きいただきありがとうございます。

皆様には、日頃から本県の国際政策にご協力いただき、厚く御礼申し上げます。

本県ではアセアン諸国等から技術研修員を招聘し、相手先国への技術協力の促進を図っているところですが、昨年度はＪＩＣＡシニアボランティアの会にご協力いただき、日本語研修を実施することが出来ました。研修員の方々からも大変好評をいただきましたことをご報告するとともに、本年の研修員受入に関しても引き続きご協力いただきますよう、お願い申し上げます。

さて、県では県内にある様々な国際協力資源、つまり、お金や物だけでなく、知識・技術、ノウハウ、それを有する優れた人材をうまく生かし、世界に貢献する千葉県づくりを進めていきたいと考えています。

そのため昨年十二月にベトナムに現地調査団を派遣し、国際協力の関係機関や現地の病院、日本のＯＤＡの現場、またＮＧＯの活動現場を調査しました。

今年は、この調査成果を踏まえ、国際協力経験者、ＮＧＯ等と連携しながら、アセアン諸国等を対象としてモデル的に国際協力活動を展開し、さらには、これから千葉がどのような国際協力を進めていくのか基本となる考え方や事業の枠組みなどをつくりあげていきたいと考えています。

そして、これを「千葉の国際協力」という形でまとめていく予定です。

シニアボランティアの方々におかれましても豊かな知識と経験を生かし、地域から国際協力にご協力、ご貢献いただけることを期待しております。

また、国際協力としては、国際協力モデル事業として、昨年度から県内のＮＧＯの皆様から国際協力活動の提案を公募し、優れた提案に対し補助を行なっています。昨年は八件の応募に対し三件の補助を行いました。

このほかにも、ドイツ・デュッセルドルフ市や米国・ウィンスコンシン州との国際交流、県内にお住まいの外国籍県民の方々にも暮らしやすい県づくり、旅券の発給、さらには、海外の災害への支援など、国際政策室では非常に幅広い分野を担当しております。

今後とも皆様方のご協力をいただきながら、ゆるぎない世界の中の千葉県を創造していきたいと考えております。

シニアボランティアの会のますますの発展とご健勝を祈念いたしまして、私からの挨拶とさせていただきます。

帰国後さらにご縁が深くなりました

岡本芙佐子　（ネパール）

二〇〇一年より二年間、母子保健・家族計画人口問題をテーマに派遣されたが、それがネパールは勿論、日本、イタリア、アメリカ、インドの多くの人々との出会いに繋がったことに感動している。

愛・地球博のネパールナショナルデイに参加されたパラス皇太子、ヒマニ妃殿下が東京にも来られた。ネパールナショナルデイの七月七日はギャネンドラ国王の五十九歳の誕生日に当たる。

来年は日本ネパール国交五十周年およびマナスル登頂成功五十周年で、皇太子、皇太子妃が今回のご来日の機会にそれらを祝う式典に臨席された。私は私の姉、姪（いずれもネパール短期滞在経験あり）と共に出席し、親しくプリンス、プリンセスにご挨拶し、ご一緒に記念撮影が出来たのは嬉しかった。記念に持参した日本の書籍、童謡ＣＤも受取って頂いた。これにはネパールテレビ局のインタビューを受けるおまけもついた。

私のネパール滞在中に現地を訪問された秋田の高校の学生グループと、ネパールに検便キャンペーン用電気自動車を寄贈されたライオンズクラブ（二グループ）の皆様には帰国後に講演をさせて頂く機会があり、再会を果たした。

ＪＩＣＡの出前講座では八日市市、市原市の中学生との真剣で楽しい出会いがあり、日本家族計画協会の国際セミナーではネパール家族計画協会婦人部長が来日され再会出来た。

ネパールでのボランティア活動に関連して知り合った三人の在日ネパール人青年男女とは親交が続いており、上記のパラス皇太子ご夫妻の臨席された日本ネパール国交五十周年を祝う式典にも一緒に出席した。

シニアボランティア活動のアフターサービスでは、ＪＩＣＡクロスロード誌の編集委員会に参加し、また同誌に二回寄稿した。シニアボランティア応募者募集説明会でのパネラーを務め、シニアボランティア募集ポスター、パンフレット、関連する新聞インタビューに登場した。

最近ではネパール人映画プロデューサーの日本での撮影収録を支援したりしている。

ネパールで活動した一員として、パラス皇太子の愛・地球博でのメッセージ「テロのない平和な世界」の実現とネパール王国の平和を祈念して筆を措きたい。

第二の故郷『マレーシア』の思い出

武藤達雄　（マレーシア）

活動を終えて帰国し、既に二年半が経ってしまった。マレー語はほとんど忘れてしまったが、Apa Khabar（元気かい！）、Sudah Makan（食事済んだ！）などの言葉が、時々、口をついて出てくることがある。

赴任先は、マレー半島西北部のタイ国境に近い町のポリテクニック（国立工芸専門学校）で、この州都からは、初代首相や前首相のマハティールも出ており、ややアカデミックな土地でもある。

要請内容は、マイクロプロセッサーによる機器制御の為の教材の開発と教授カリキュラムの作成であった。カウンターパート（ＣＰ）の先生は、マレー系の熱心なイスラム教徒で、沢山の命題を準備し、待ち構えていた。

活動当初は、互いに何が出来るの？　と腹の探りあいであったが、以前から、彼を悩ましていた或るプログラムの解決を図ったことで、彼からの技術的な信頼が得られた。

マイクロプロセッサー実習は基礎的なもので、ディスプレー上のシミュレーションやせいぜい発光ダイオードの制御で、もう少し、面白い応用テーマがないかとＣＰと模索していた。

偶々、教育省より、ＡＢＵロボットコンテストのマレーシア大会の招待状が届いた。このコンテストは、元はＮＨＫが主催し、発展的にＡＢＵ(Asian Broadcast Unit) へ引き継がれたもので、当時マレーシアは、このコンテストに参加しておらず、国際大会へ代表を送るべく、予選会がマレーシア・テレビ主催で行われることになったものである。マイクロプロセッサーの応用の恰好のテーマと思われ、電子科と機械科学生の混成チームで参加することになった。

まず、構想検討から始まり、各種の設計、部品収集、試作、テストが放課後やほとんどの休みを返上して行われた。また、栃木の国立小山工業高等専門学校（小山高専）に、インターネットを通じて、技術的なサポートを依頼したり、ＣＰと現地日本企業へ部品の寄付をお願いに行ったりした。それにしても、日本では容易に入手出来る部品が現地には見当たらず、大変難儀した。

予選会には、大学から九校が、ポリテクニックからは当校のみが参加した。大学生のチームを相手に善戦したが、残念ながら五位に終わった。

この結果がポリテクニックの校長会議で報告され、毎年開催のインター・ポリテクニック・ロボット・コンテスト（ＩＰＲＣ）に結びついた。第一回ＩＰＲＣは、当校の実績がかわれ、ホスト校に指名された。各校の技術レベル向上セミナー、ルール作り、会場構想、大会運営方法等関連の先生方を結集し、その準備がなされた。

セミナーでは、マレーシアのロボットの専門家や小山高専の先生を招聘したり、大会運営ノウハウの調査に、インドネシアのポリテクニック（前年度優勝校）を、ＣＰと訪問したりで、帰国直前は、私は新規教材開発も併行して行っていたので、目の回るような忙しさであった。

お陰さまで、合宿、大会、反省会（食事会）等数々の学生との思い出が生まれ、帰国した。現在もＣＰを含む先生方と電子メールでの交流が続いている。

ボランティア活動で第二の人生

上田義晴（タイ／ラオス）

「千葉県ＪＩＣＡシニアボランティアの会」に入会し、その会報創刊号にて、「ご恩返しの第二の人生」と題してこれまでの人生の総括を行うと共に小生の思いの一端を申し述べましたが、千葉住民として千葉へのご恩返しを

実行していくに当たり、昨年五月二九日の当会総会に於いて平成十六年度の新任幹事の一人に選出頂きましたのを機に、千葉県の国際協力事業の側面支援と、ＪＩＣＡの地域／国際協力事業のお手伝いをしながら、両者を繋ぐようなボランティア活動をしたいと念じてまいりました。

幸い分掌業務が、渉外担当ということでしたので、千葉県の国際協力事業関連では、千葉県が招聘しました海外技術研修員の日本語支援や、研修先でスムーズに研修が受けられるような環境作りや通訳、生活相談等コンサルタント的なお手伝いもしてきました。

ＪＩＣＡ関連ではＪＩＣＡが募集するシニアボランティアの募集説明会への参画や各種イベント、出前講座への側面支援等も行ってきました。更に、千葉市国際交流協会で、千葉在住の外国人（昨年は、アメリカ人、現在は、英国人と中国人）に対する日本語指導のボランティア活動を行ったり、同会主催の「国際ふれあいフェスティバル」への参画等を通じて、広い意味での千葉へのご恩返しを心掛けている次第です。

今後とも、千葉県とＪＩＣＡの国際協力事業に係わるボランティア活動を通じて千葉住民として千葉へのご恩返しを心掛けていきたいと存じますので、関係各位の引続くご理解、ご支援を宜しくお願い申し上げます。

ボランティアは生き甲斐

斎藤　健　（ニカラグア）

私の赴任したニカラグアは中米で現在下から数えて二番目に貧しい国。現在と言ったのは、かつてはそうでなかったということです。

国土面積は一三万平方kmだから日本の約三分の一、人口は五五〇万人で千葉県のそれより少ない。一億二千数百万人の日本と比較したら随分小さいと思われるかも知れませんが、世界で約二百ある国々の中で五五〇万人以下の国が約半数を占めることを見れば中位に位置することになります。でもこの位の規模の国ですと、ちょっとした事で経済も上向いたり危機に陥ったりします。

一九七二年に大きな地震があり首都マナグアの建物は壊滅的に破壊されました。その上に内戦もあったので、今外国からの援助なしには生きていけない状況にあります。

私は一級建築士で建築が専門。住宅建築の指導を目的にニカラグアに行きました。現地の建築物は鉄筋コンクリート造・鉄骨造・コンクリートブロック造とありますが、高層建築物は見当たりません。

一般住宅と共同住宅は、コンクリートブロック造が主流ですが、驚いたことにこれ等に加えて発泡スチロールの住宅が建てられております。

厚さ六㌢の白い発泡スチロールの片面または両面に直径二・五㍉の細い針金の金網（目は十一㌢×八㌢）を添え、両面にモルタルを塗っていく。塗り厚は三㌢位、これを材料に二階建て住宅の壁・床板・階段など全てを作ってしまうのです。

モルタルを何回も塗って固まるまでは風に揺られて、ふわーっふわーっ。屋根はこれにスレートか鉄板の波板を葺いて終わりです。この話を日本人にしても誰も「嘘だ！」といって信用してくれません。私ですらこの現場を初めて見た時、遊びか玩具でも造っているのかと思ったくらいです。

この日本人の想像を絶する実情をふまえ、ニカラグア式建築の分類を含め、建築全般にわたって計四冊の本を書き、教科書として置いてきました。スペイン語で書くということは随分労力のいることでした。これにより私の語学のエリアにスペイン語が加わりました。

ニカラグアはローマカトリック信者が九十五％。その国の宗教が何であるかを知って任地へ行くということは大変重要なことだと考えます。物事の考え方、行動形式が多かれ少なかれ宗教に基づいているからです。

日本の常識が外国では通用しないことを沢山経験します。持てる者が与えるのは当たり前で、貰う方は当然の権利と思われがちで、そこに援助の難しさがある気がします。「グラシアス」と言ったってその言葉の意味が日本の「ありがとう」とは大きく違う場合があります。

ボランティアをするのは、私にとって生き甲斐であり楽しくもあり面白いことです。何が起っても驚かない、汚い事も平気で受入れられる。彼らの中に入っていって話し、一緒に行動することが必要で、そこに新しい発見があります。

面白い話は山ほど有りますが字数の制限から一つだけ書いてみました。

『年齢制限が無ければまた行きたい、まだまだ元気』

服飾デザインの技術移転

井川雅子（チュニジア）

ボランティアも海外単身赴任も初めてなら、アフリカ大陸に降り立つのも初めて。年齢も「今年を逃がせば来年はない！」しかし二年間、主婦が家出状態になれば被害を受けるのは夫だが「人生、やり残しがあると後悔する、カルタゴの歴史は面白そうだから遊びに行くよ。」と背中を押された。

要請内容は二〇〇八年の貿易の自由化に対応できる国際競争力をつけること。配属は工業省繊維技術センター。

すでにドイツからのボランティアが二人いて、男性はミシンのメンテナンス、女性はドイツ向け量産衣料品の指導をしていた。

工場回りが多い彼らだが「日本とドイツは似ている・・・」と、親切にしていただいた。偶然同じ地域に住んだため、通勤時は車に便乗させてもらい、彼らのオフィスにも行った。ボランティアとはいえ馬を飼っているのには驚いた。

帰国時には馬二頭をフェリーで持って帰り二度びっくり、日本のＳＶには想像も出来ない。彼女の友達には、幼児連れのシングルマザーもいて、日本食を何のためらいもなく食べる可愛い三歳の女の子は味覚もグローバルなら言葉もドイツ語、英語、フランス語、アラビア語が理解できた。

私の技術移転の相手はデザイン企画室の六人。美術大学や専門学校卒とは言え実践に乏しく、半年前までは車のデザインをしていた人もいた。業務内容と今までの仕事に隔たりがあり、技術移転の容易でない事を痛感。

現状のチュニジアの繊維産業は生地、型紙持込の大量生産が主流。今後の課題としてもう一つの柱となるオリジナル企画に焦点を絞る。センターは国内外の見学者が多いので、センターに常設の情報発信基地となる展示室開設の企画書を提案。今までの単独の仕事を六人の共同作

業にし、「知恵を出し合い磨く」グループ活動の重要性と成果を実践した。

先ず自国を知ることで世界との共通点や民族の特性を把握することから始めた。『ライフスタイルを五分類』。『エイジ分類』。『オケージョン・マップ』。『ファション・トレンド』。以上を、毎日ミーティングを重ね、コラージュやグラフでパネルに作成し展示した。最後に『オリジナルコレクション』を三組に分け作製に取り掛かる。

目的はデザイナーとパタンナー共同作業で成果をあげること。三組が競い合い、ターゲットを設定。素材、デザインを決める。縫製ではパタンナーがリードする姿が愉快だった。

イスラムの人々の神と共にある生活を理解することに努めながら慌てず、焦らず、怠けず誠実に働く事に専念した二年は私自身多くの事を教えられた。

帰国後、想定外の事件（？）は天皇皇后両陛下拝謁で御所に上がれたこと。報告を、体を乗り出して熱心にお聞きになるお姿には感動すら覚えた。会話の中から仲のよいご夫妻の日常が垣間見え、暖かい雰囲気を感じた。

両陛下の視点は日本を中心に語られるのではなく相手国民の幸せの形を思いやる、ご造詣の深さにあります。華美で無く落ち着いた御所、お召し物も上手に着こなされているのに感銘を受けました。お菓子やお茶も私たちが戴きやすい気配りをされる。このさり気なさは見習いたい！。

ご誠実なお人柄には慈悲の心が感じられ、心に残る貴重な一時間でした。

（関連記事が八頁にあります）

勤勉で親日的なヨルダンの人達

高木利公（ヨルダン）

二〇〇三年十月から約一年半、中東のヨルダン国において、アラブ女性の地位向上を目的に、ザルカ市の短大で情報処理学科の教職員十名にネットワークプログラミング（ＪＡＶＡ言語）に関する指導を行ってきた。

プログラムを実際に動かして見せるために、ＬＩＮＵＸ－ＯＳによるウエブ／メールサーバ等も立ち上げた。短大教官と女子学生への共同講義も実施した。

ヨルダン国は、ちょうど北海道と同じ面積、人口で、緯度が鹿児島県と同じところに位置している。首都アンマンの海抜プラス千㍍から、死海のマイナス四百㍍まで高度差があり、一時間のドライブで気温差摂氏十度以上を体験できる。中東の軽井沢と呼ばれ避暑地としても有名である。イラク、イスラエル等に囲まれた小国であるが治安は保たれていた。石油資源が全くないため、観光立国を目指している。ペトラ遺跡（世界遺産）、ワディラム砂漠、ジェラシのローマ劇場、また死海やアカバの港も有名である。

ザルカ市は戦後パレスチナ人が移住して出来た都市と聞いたが、いまやヨルダンで第三の都市となっている。情報処理学科の教職員十名のうち八名はパレスチナ人であった。教員の親は、海外（クエート、サウジアラビア、チュニジア等）に出稼ぎに行きそこで子女を教育、短大の教員にしたケースが多い。

教職員達が、自宅に招待してくれた。お米を使った料理はたいていい口に合い、とてもおいしかった。果物の種類も多い。最初はお客と男性が食事をする。ザルカの場合はその後家族全員で団らんをしたが、アンマンでは女性は出てこない場合も多かった。

情報学科の教員に結婚披露宴に招待された。こちらの結婚披露宴は、八月が多い。涼しい夜始める。新郎は前の学校で生徒を見初めたそうである。

夜九時に結婚式場に到着後、程なく花嫁と花婿が一台の車で到着。楽団の音楽につれて花婿花嫁を先頭に階段をゆっくり上っていく。三階に着くと、上の階は男性禁止ということで、四階に上がる花嫁、花婿を見送る。式場が男女別フロアーのため、あとは妻の撮るビデオが頼りである。

男性フロアーでは、先生方とサッカーのアジアカップでヨルダンと日本が対戦した話で盛り上がる。衛星放送は普及しており皆が観戦していた。二時間あまりで、飲み物一回、ケーキが二回振る舞われた。

花嫁と花婿のいる女性フロアーでは、「女性達がスカーフを脱いでダンスに興じ、ケーキ入刀が行われる。花婿からの指輪をはじめとする貴金属品のプレゼント披露等が行われ、二時間が飽きることがなく過ぎ去る」そうである。

パレスチナ人の人情は、日本的な感覚を感じることがある。土産物をくれるときに「ちょっとだけど」とか、よく意味が通じないのに、とりあえず「イエス」と言う等々である。四季のある生活が背景かとも思われた。

またアンマンでのきれいな月見をしてみたいものである。

カンボジアの思い出

北垣勝之（メキシコ／カンボジア）

私は二〇〇三年から二年間、カンボジアで二度目のボランティア活動をしてきました。

さて皆さんはカンボジアと聞いて何を思い出されますか。おそらくアンコールワットとか、クメールルージュ（ポルポト）とか、シアヌーク国王ではないでしょうか。

かつてクメール王国は、十一～十四世紀にインドシナ半島の大半を制覇しました。その栄華の跡がアンコール遺跡群です。十五世紀以降、王国の権勢はジリ貧となり、時に近隣のシャムや阮朝の進出にあって衰退します。それを打開するための窮余の策がフランスの保護下に入ることでした。

一八六三年から九十年間、比較的安穏な植民地時代を経て、一九五三年シアヌーク殿下は独立を果たしました。しかし国内外対抗勢力との確執、とりわけベトナム戦争の影響を蒙り国内は分裂、一九七五～七八年には同族相食むポルポト・ジェノサイドが起こりました。

波乱万丈の混乱期も一九九一年パリ和平協定締結後は、国連はじめ諸外国の援助を得て次第に落ち着きを取り戻してきました。しかし、この間の内戦による人的物的資源の損害は想像以上でした。ゼロからの国家再建といっても過言ではありません。

最近のカン

ボジアの人々は半世紀にわたる負の遺産をすっかり忘れたように見受けられます。この十数年、外国からの援助漬けに馴致されてしまったからでしょうか。それとも熱帯性気候の中で、直播の稲作と早熟の果物、放し飼いの牧畜、トンレサップ湖の投げ網漁があれば、後はハンモックに揺られながら生活できるからでしょうか。あるいは上座部仏教の諦念思想が行き届いているからでしょうか。

それらもさることながら、人々はようやく自立へのテイクオフを始めたようです。もちろん交通、通信、電力などのインフラ、および教育、医療などの社会システムはまだまだ不十分です。しかし、カンボジア国民の明日へ向けた胎動を感じます。例えば、私が滞在していた地方都市バッタンバンでも、英語塾とコンピュータ教室はどこも大盛況でした。

援助団体やボランティアからの外知導入、インフラ整備と自立意識の台頭となれば、国際市場からの有効な外資導入も容易になるでしょう。そうすれば観光と農業だけに依拠した経済体質から脱皮することも可能です。ただ地政学的にいえば、タイやベトナムと同じ開発路線をたどるのではなく、豊かな自然を利した人的物的流通国家に発展して貰いたいと願っています。

カンボジアでの二年間、「何のための援助か」を常に考えてきました。人道支援が終わり、いよいよ国づくりの段階に入りました。皆さんは世界が求めるカンボジアをどのようにお考えになるでしょうか。

コスタリカの二年間

増田定雄（コスタリカ）

空港に降り立った第一歩

その日平成十五年四月一日、私は中南米コスタリカの首都サンホセ空港の入管手続きを待つ長い行列の中にいた。ほんの少し前、夜八時半まるで満開のお花畑の様に夜景が光り輝く都市の空港に機は着陸した。これからここでボランティア活動をすると思うと、途上国に出掛けるたびにいつもの様に、これからの日々への一抹の不安と何とかなるさと言う強がりに似た楽観が心の中で交錯していた。そしてコスタリカ派遣が決まったとき真先に思い浮かんだ事は軍隊を持たない国、その費用を教育と国民皆保険に当てている、そして大統領がノーベル平和賞を受けた平和国家と言うことだった。これらについてこの国の人々はどんな考え方なんだろうかと興味は大きかった。

私の業務分野

派遣された私の職務はプラスチック加工、リサイクルの指導助言、職場は国立職業訓練所（ＩＮＡ）のプラスチック加工部門、当時部門長不在で職員六名がカウンターパートであった。彼らはそれぞれ陽気で個性的な加工技術指導員であった。難題はコミュニケーション、私の俄か仕込みのスペイン語では掘り下げた対話は困難であったが彼らの陽気さと親切さに救われた２年間であった。指導内容も多岐で十分な結果が出せたとは言い難かったが彼らから学ぶ事も多かった。　結局、現場業務では設備運転中の作業安全確保を助言し、ペットボトルのリサイクル技術移転／プラスチック加工技術では成形不良トラブルシューティングを（スペイン語に翻訳した）ノートにして提供した。

軍隊と教育費と医療費

軍隊を持たない国について平均的国民は幸せを感じている様に見受けられたが、国を守る必要が起こったとき貴方がたはどうしますかと質問したとき隣国と支援協定を結んでいるから守ってもらえると言う方がいた。この返答を聞いた時、一瞬日本の日米安保条約を思い出して他人事ではないと感じた事でした。多くの方は外国の軍隊がコスタリカに攻めこんでくる事はありえないと考えている。その事よりも医療制度が徹底していて殆どの国民が医療費無料、子弟の義務教育費無料の方が遥かに国民に安心感をもたらしている事を実感した。ある家庭で母親が癌に掛かっている事を聞いたが医療費に関しては全く心配していない事に驚いた。（尤も高度な医療を受けているかどうかは聞き漏らしたが。）しかし又一方で青年協力隊員から聞いた所では都市部から離れた所謂僻地の家庭では学校に通えないので借家生活をしなければならないがその費用がなくて無料の教育さえも受けられない家庭があると言う現実にも接した。

この国にも重い課題がある

現実はこの様な状況の中で失業者増、税収不足、医療と教育費肥大で国家財政が危機に貧している事を聞いた。教育と福祉と平和国家の維持をどう解決するかはどの国にも重い大きな課題である事を知った二年間であった。

ものづくり技術協力

菅井啓祐（メキシコ）

二〇〇三年四月から二〇〇五年四月までメキシコ市にある中小メーカー会員を主体とした商工会議所に、経営管理及び品質管理担当の同僚シニアボランティア二名、それにグループコーディネーターの小生と計三名でグループ派遣されました。

協力内容は主として生産現場のカイゼンでしたが、具体的には５Ｓ及びカイゼンのセミナー、一日工場訪問による改善指導、及び一日訪問企業より選んだモデル企業の長期指導を行いました。

カイゼンに対する熱い視線

メキシコも経済解放が進んだことから、主としてアメリカ経由で入ってくる東南アジア製品との厳しい競争にさらされて、地場企業は危機感が強く、又日本のものづくり技術が優れていることが良く理解されていることから我々の行く先々で熱い視線を痛いほど感じました。

セミナーは『５Ｓとは？』、『５Ｓの具体的推進方法』、『５Ｓのカイゼンへの応用』の三つの演題で、メキシコ市及び周辺の会議所支部の要請により一般公開とし、二年間で十回開催しました。そのほかモデル企業十三社の従業員のための社内セミナーを開催しました。いずれも満員の盛況で、さらに訪問要請は引きも切らず、断るのに苦労しました。

技術水準は残念ながら低い

しかし残念ながら技術水準は低く、同僚の評価では三～四十年前の日本の中小企業並みとのことでした。ブラジルと並んでラテンアメリカの二大工業国と言われるメキシコですらこの状況ですから、他は推して知るべしでしょう。

同地域は一、二の例外を除き企業が常に時の政権と密着し新規参入を排除し、真の意味での自由主義経済を過去に経験して

いないことに原因があろうかと思われます。このため経営者は口ではカイゼンと言いますが、現場を知らず、少数のベテラン工員に任せっきりです。任された工員も特に地位や給料が決められた以上に上がらないわけですから、従来のやり方を踏襲するのみです。日本人の目からするとこんな事も出来ていないかということになります。

優先業種の選定

実は我々の派遣目的の一つに裾野産業の育成協力がありました。しかし、残念ながら、メキシコでは地場の部品産業は事実上外資に駆逐され、消えつつあるのが現状です。このため我々の活動対象も最終製品メーカーに絞らざるを得ませんでした。

又、長らく保護された市場に慣れきった故、リスクを取る起業家精神も希薄な地域のため新規の分野での協力も難しいと思います。今後はその国の地場産業の得意分野あるいはマーケットシェアの高い産業に狙いを定め、これらの地場企業が外資に対抗し、且つゆくゆくは輸出も視野に入れられるような技術協力を模索し、対象国と綿密に打ち合わせることが協力を成功させる鍵になると痛感しました。

何れにせよ、中進国からのものづくり協力依頼は今後益々増加傾向を辿るものと思われますが、人材さえ揃えば、コストを抑えて推進できるプロジェクトですので、今後定年を迎える団塊の世代から沢山の参加者が出

各地で会員が講演

本年度も各地で会員による講演が行なわれております。これまでに実施されたものは左表の通りです。各地とも会員の現地活動、現地生活などについて熱心な講話が実施され、海外におけるシニアのボランティア活動と海外生活、異文化についての理解促進が図られました。

表の構成は上列から、講座の名称・開催日時・開催場所・講演テーマ・講師氏名・受講者、となっています。

市原市学校警察連絡協議会 「第27回中学生の集い」 （千葉出前講座)	流山市公民館主催 「ゆうゆう大学」	大網白里町生涯学習課主催 「大網白里町国際交流協会基調講演会」
6月14日（火） 9:00～17:00	6月24日（金） 9:30～11:30	6月24日（土） 14：00～16：00
県立鶴舞青年の家	流山市南流山ｾﾝﾀｰ	大網白里町中央公民館
「ﾈﾊﾟｰﾙの家族計画協会での活動体験と女性問題、人口問題、性教育、保健衛生、ｶｰｽﾄ制、など」	「海外におけるｼﾆｱﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ活動と異文化体験について」	「JICAｼﾆｱ海外ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱに参加して～暑いﾎﾝｼﾞｭﾗｽでﾈｯﾄ栽培～」
岡本芙佐子さん (ﾈﾊﾟｰﾙ/印旛郡栄町)	黒田昭太郎さん (ﾏﾚｰｼｱ/柏市)	有光武臣さん (ﾎﾝｼﾞｭﾗｽ/八千代市)
市原市21中学校からのﾘｰﾀﾞｰ63名と市原市学警連指導者約20名	流山市ゆうゆう大学生60名	70数名の地元の方々

中学生ﾘｰﾀﾞｰに熱演中の岡本芙佐子さん

東南アジア懇親会開かれる

梅雨明けまじかの七月十一日夕刻、舞浜駅前のイクスピアリにあるエスニックレストランで東南アジアに派遣された会員有志による懇親会が開催されました。五月の総会後の懇談会で東南アジアグループで親睦会が話題となり実現したものです。

（写真提供　宮崎　泰　氏）

県下各地より十一名の会員と品川会長が参加され、南の国々の料理を取りつつ大変愉快な時をすごしました。終了時には次回開催要望の声もあがりました。（黒田昭太郎）

平成十七年度ＪＩＣＡシニア海外ボランティア春募集説明会に参加

四月二十三日(土)十時～十二時三十分に船橋市中央公民館にて開催されたＳＶ春募集説明会に堀端俊雄氏（ラオス、システムエンジニア、我孫子市）と尾崎　進氏（タイ、農業経営・生活向上施策、八千代市）がパネリストとして体験発表をされました。現地活動の写真説明の後、健康管理、食生活、安全管理、交通事情など司会の説明に答える形で進み、さらに会場からの質問も多く、真面目な雰囲気で推移しました。

新しい仲間が増えました

千葉県ＪＩＣＡシニアボランティアの会の本年の新会員八名は次ぎのとおりです。（敬称略）

加藤哲男（ボリビア・流山市）
北垣勝之（メキシコ／カンボジア・白井市）
小松秀世（タイ・大網白里町）
菅井啓祐（メキシコ・習志野市）
高木利公（ヨルダン・館山市）
田辺光宏（メキシコ・習志野市）
花輪淳二（ネパール・千葉市）
増田定雄（コスタリカ・千葉市）

ご活躍をお祈りします

現在当会会員の次の諸氏が再派遣中です。（敬称略）

及川淳一（ドミニカ）ＳＶ
大格登未（ヨルダン）ＳＶ
橋場弘長（カンボジア）ＳＶ
畑　宏幸（チモール）専門家

さらに今秋次の会員が派遣されます。（敬称略）

柏尾英彦（サモア）ＳＶ
加藤哲男（ペルー）ＳＶ

千葉県招聘海外研修員受入事業への協力活動

昨年度、千葉県総合企画部から当会に千葉県招聘海外技術研修員受入事業への協力要請があり、来日した七名の技術研修員のお世話を日本語指導中心で引受けました。シニアボランティアの経験を活かし、各研修先での研修が円滑に進むよう仲介したり研修員の生活相談に応じたり等、千葉県関係者、研修員双方の好評を得ました。昨年度は初めてのことでもあり、取り敢えず当会の役員でこの要請に対応しました。

今年度も千葉県から下表の内容により海外研修員を受け入れたいので協力してほしいとの要請があり、当会役員会で検討の結果前向きに取り組むことにしました。今年度は要請内容もマンツーマンのサポートを希望されるなど当会への依存度が高くなりそうなので、当会会員、役員の中からボランティア協力者を募り対処していくことにしました。

今回は時間的制約もあり、電子メールを使って会員に声をかけさせて頂き、応募された皆様と役員から七名の担当者とサポート担当者を選定させて頂きました。派遣国別、研修分野別の担当内容については下表と写真の説明をご覧ください。

当会のこうした協力が千葉県の国際協力活動に貢献し、ひいては対象国との友好が促進されることを期待しております。

（上田義晴）

９月22日に来日した研修員の皆さん。向かって左から
グェン ウォン ハ　さん（ベトナム）　(6)
イシイ シンティア　マサミ さん（ブラジル）　(7)
タンハン ドゥサディー さん（タイ）　(3)
トラン バオ　グェン さん（ベトナム）　(5)
タマウット　ベンジャウォン さん（タイ）　(2)
キョー　ジン トン さん（ミャンマー）　(4)
ダムロンラクタム イッティチョート さん　（タイ）　(1)

	研修分野	研修機関	担当者	サポート
(1)	機械設計	東洋エンジニアリング(株)	堀端俊雄	上田義晴
(2)	地震の測定と解析	産業支援技術研究所	寺戸康隆	品川洋之助
(3)	水産加工・処理	(株)ニチレイフーズ	宮崎　泰	後藤　優
(4)	自然エネルギー	農業組合法人　和郷園	山本茂穂	山本修身
(5)	バイオマス	東京大学生産技術研究所	岩谷宏司	黒田昭太郎
(6)	行政改革	千葉県庁総務課	尾崎　進	楠木孝雄
(7)	小児看護	千葉県子供病院	市井博子	梅谷陽子

梅谷副会長パネルディスカッションに出演

浦安市主催　国際理解講座　於 浦安市民プラザ

「世界の国々で活躍するボランティア」～ＪＩＣＡ青年海外協力隊・シニア海外ボランティア経験者より～

三月十九日の午後、二時間にわたり青年海外協力隊から高橋克影さん（千葉市、シリア・アラブ共和国派遣、システムエンジニア）および佐竹千草さん（千葉市、中国・ハルピン派遣、日本語教師）がパネリストを、当会からは梅谷陽子さん（大網白里町、ホンジュラス派遣、婦人服製作指導）がコーディネーターをつとめました。

ＪＩＣＡ，青年海外協力隊、シニア海外ボランティアの途上国における活動の説明の後、シニアが自らの経験を基にして、若い二人の元隊員に問いかけ、出発前の思い、現地での経験、帰国後の感慨などを豊富な映像を見ながらわかりやすく語ってもらうというパネルディスカッション形式で進められました。

［編集担当よりお知らせ］

井川雅子さんは平成一七年三月二日、天皇皇后両陛下に拝謁の機会を賜り、ＪＩＣＡ緒方貞子理事長および大塚正明協力隊事務局長の引率のもと、御所に参内され、両陛下に帰国のご挨拶と任地での活動報告をされました。今回拝謁の栄に浴されたのは、全国で昨年帰国のＳＶ四名、日系社会ＳＶ二名の方々でした。おめでとうございました。なお千葉県関係では井川さんのほか吉原久雄さん（印西市・ＳＶ）も含まれています。

拝謁後の記念撮影　（吉原久雄氏提供）
向かって前列左端が井川さん、後列左から２番目が大塚局長、左端が吉原さん

編集後記

会報３号をお届けします。会員の皆様のご協力で会の運営も少しずつ軌道に乗り、活動が活発に行われ、皆様にお知らせする内容が豊富になってきています。昨年度の会報発行は八頁建て一回でしたが、本年度は発行を二回に増やし延べ頁数も増やしたいと考えています。

今回もたくさんの寄稿を戴きました。皆様の参画意識の高さに感謝しております。

よりよい広報活動のため役員は情報を集めるのに総力を挙げておりますが、会員の皆様のいっそうのご協力をお願いします。

（山本茂穂）

ＣＣＢ便り

ＪＩＣＡでは地域との連携を強化していますが、今回は千葉県を管轄するＪＩＣＡ東京　連携促進グループを紹介します。千葉県を担当するのは、神保職員（女性）と中野市民参加協力調整員（男性）、そして国際協力推進員の大山です。千葉県での国際協力推進やＯＢ会支援に積極的に取り組んでいますので、質問などいつでもご連絡ください。

（大山美砂子）

本紙に対するご意見、JICA、ちば出前講座、お問い合せは下記にお願いします。

千葉県JICAシニアボランティアの会
04-7131-5830（黒田）

千葉県国際協力推進員
043-297-0245(大山)
jicadpd-desk-chibaken@jica.go.jp